

キリスト教と現代思想／現代哲学： 「エコノミー／オイコノミア」概念をめぐって

柳 澤 田 実

研究プロジェクト「キリスト教と現代思想」は2015年度から始動した。その学問的背景について、はじめに簡単に説明しておきたい。1970年代以降のフランス・イタリアの哲学・思想において、ユダヤ＝キリスト教的問題系の回帰ともいべき現象が見られる。具体的に名を挙げるならば、E.レヴィナス、J.L.マリオン、J.デリダ、R.ジラルド、G.ヴァッティモ、G.アガンベンらのことで、最も新しいところでは、思弁的实在論というムーヴメントで最近日本に紹介されたばかりのQ.メイヤスーなどもこの中に含めることができる。こうした哲学の側からの神学への接近は、一方の神学分野で、抽象的な組織神学以上に、具体的な社会問題に密着した実践神学が盛んになっているという現状を考えると、一層興味深く思われる。また、これらの思想や哲学が「現代思想」の名の下に、キリスト教圏ではない日本で熱心に受容されている現実もまた非常に興味深いものである。端的に言って、信仰もなく、教会にも行かない人たちが、一体何に惹きつけられているのだろうか。「現代思想」の名の下に伝達されているキリスト教思想とはどのようなものなのか、また、彼らのテキストから浮かび上がるキリスト教の現代日本におけるアクチュアリティとは何なのかについて、明らかにしていきたいと考えている。

この研究プロジェクトでは、先に列挙した思想家、哲学者のテキストの読解を行い、彼らの議論のなかでキリスト教に関わる問題がどのような必然性において、登場するのかを精査するとともに、同時代のドイツの神学との比較検討を行う。実のところ、日本では、キリスト教神学と現代思想・現代哲学の両者

に関心や学術的知識を持つ研究者の数は決して多くない。こうした状況をふまえると、この数少ない研究者同士が集まって研究する場を作っていくことと同時に、神学者と現代思想の専門家の学問的交流の場を作っていくことも本プロジェクトの重要な課題と言える。このプロジェクトのメンバーに、学外から岡田温司先生（京都大学）、佐藤啓介先生（南山大学）に加わっていただくことができたのは、大変に恵まれたことであったことをここに申し添えたい。

さて、今年度は研究会と講演会をそれぞれ一回ずつ開催した。まず初回の研究会（2016年1月16日）では、プロジェクト・メンバーの佐藤啓介先生に「20世紀における現代思想とキリスト教の布置を振り返る」というタイトルで発表いただいた。まさにタイトル通り、プロジェクトの議論の土台となる思想史的布置を、ポイントとなる文献や論文の紹介を軸にお話いただいた。講演会は、2016年2月21日に、賀川記念館のメモリアル・ホールで開催した。講演者の岡崎乾二郎氏は、現代アート、現代思想および批評の分野で、第一線で活躍する先鋭的なアーティストとして知られている。氏が行った有名なブランカッチ礼拝堂の研究（『ルネサンス 経験の条件』（文春学藝ライブラリー）参照）に明らかかなように、その作品および文章ではキリスト教がしばしば重要な主題となっているが、その理由について岡崎氏が明らかな言葉を与えたことはなかった。この講演会では、プロテスタントの牧師を曾祖父、祖父にもつ岡崎氏が、キリスト教的実践と芸術制作との関係について講演された。題材は、ブランカッチ礼拝堂のマサッチオによる壁画、建築家・白井晟一と賀川豊彦との関係、そしてファン・ルナやホセ・リサルとといった19世紀のフィリピンの画家たちにまでおよび、これまで氏が研究してきた内容を、その最新の題材まで含めキリスト教という一つの筋で読み解くという充実した内容であった。

次年度からは、さらに研究会や講演会の回数を増やし、プロジェクトを充実させていく所存である。多数のご参加をお待ち申し上げたい。